

Title	高齢期の認知機能に与える職業経験の複雑性の影響
Author(s)	石岡, 良子
Citation	大阪大学, 2013, 博士論文
Version Type	
URL	https://hdl.handle.net/11094/60009
rights	
Note	著者からインターネット公開の許諾が得られていないため、論文の要旨のみを公開しています。全文のご利用をご希望の場合は、 〈a href="https://www.library.osaka-u.ac.jp/thesis/#closed"〉 大阪大学の博士論文について 〈/a〉 をご参照ください。

Osaka University Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

Osaka University

氏名	石岡良子
博士の専攻分野の名称	博士（人間科学）
学位記番号	第 26069 号
学位授与年月日	平成 25 年 3 月 25 日
学位授与の要件	学位規則第 4 条第 1 項該当 人間科学研究科人間科学専攻
学位論文名	高齢期の認知機能に与える職業経験の複雑性の影響
論文審査委員	(主査) 教授 佐藤 眞一 (副査) 教授 金澤 忠博 准教授 権藤 恭之

論文内容の要旨

本論文は成人期の職業経験が高齢期の認知機能と関連することを検証し、生涯発達の視点から認知加齢を説明するモデル構築に寄与することを目的としている。職業は一般的なライフコースにおいて多くの人が経験する事柄であり人生の中でも長期に渡る生活環境である。職業経験と高齢期の認知機能との関連は一義的には個別の研究で検討されているものの、職業経験を評価する指標や研究デザインなど方法論的問題が存在する。本論文では職業経験における認知的活動を定量化する指標を考案し、成人期の職業経験が高齢期の認知機能に影響するかを検証する。

第1章では先行研究の背景と本論文の目的について説明した。第1節では、認知機能の加齢変化を捉える上で必要な枠組みを示すため、認知機能と年齢の関係について先行研究を概説した。第2節では、高齢期の認知機能に影響する要因として生活環境が注目される研究背景について社会学の理論を中心に説明した。そして、生活環境と認知機能との関連を検証した研究とそれらの関係を生じさせるメカニズムに関する仮説を整理した。第3節では、職業経験と高齢期の認知機能との関連を検証した研究から職業経験を評価する指標の問題点を示した。第4節では本論文で職業経験の評価指標として着目する仕事の複雑性の有効性と方法論的問題について説明し、その解決方法を述べた。第5節では、本論文で検証する3つの研究目的について述べた。

第2章では職業の認知的活動を定量化する方法を確立させ、成人期の職業経験と高齢期の認知機能との関連を検証した。研究1では、職業経験における認知的活動を定量化する指標を作成するために、職業に基づく複雑性と個人が仕事を行う上で必要であった技能の2側面を評価する指標の有効性について検討した。その結果、仕事に必要な技能が高齢期の認知機能と関連が示され、個人差を反映した評価の有効性が示された。研究2では、研究1で得られた結果から包括的に職業経験を評価する方法を考案し、70歳高齢者の大規模サンプルのデータを用いて認知機能との関連を検証した。その結果、教育歴や児童期の成績などの関連要因を統制した上でも、複雑な職業経験をした高齢者は認知機能が高いことが示された。認知的刺激の豊富な仕事の積み重ねが脳の神経細胞やネットワークの機能性に影響し、高齢期の認知機能に個人差を生起させると考えられる。研究3では、80歳高齢者の大規模サンプルのデータを用いて、職業経験の複雑性が及ぼす影響が70歳群と同様に示されるのか、あるいは年齢による違いがあるのか横断的に検討することを目的とした。その結果、80歳群においても複雑な仕事を経験した高齢者は認知機能が高いことが示され70歳群の結果が再現された。この結果から、生理的機

能の低下が大きいと考えられる後期高齢期の高齢者においても成人期の職業経験が影響する可能性が示唆された。また、一部の認知課題でコホートと性によって職業経験や教育歴の影響は異なっていた。この結果は、社会的規範や戦争などコホート間の時代背景による質的な違いの影響と解釈された。

第3章の総合論議では、本研究で考案した職業経験の評価方法の特色と応用可能性、そしてコホート研究の成果と限界について整理した。そして、生涯発達の視点から認知加齢を包括的に説明することを目指し、本研究の結果から考えられる仮説や研究の展開について述べた。

論文審査の結果の要旨

人の生涯にわたる長期的変化を探る生涯発達心理学においては、マクロな研究モデルに基づき、多量のデータを根拠とすることによって普遍化可能な法則を定立することとともに、唯一無二の個人の人生航路を描く個性記述的な論拠が求められる。

本研究のテーマである高齢者の認知機能を、それまでの人生の在り方から記述する際に、従来は、遺伝的要因、若年期の学習経験、最終的な教育水準、社会経済的地位、健康状態などの影響が指摘されている。職業は、その選択から退職に至るまで、人生の多くの時間を占めるため、退職後の高齢者の認知機能の規定因として定立することに問題はないであろう。しかしながら、職業経験の何をどのように評価して、そのデータと老年期の認知機能との関連性を実証するかは、さまざまな要因が交絡しているため、実証的な成果として示すことに困難があった。

そこで、本研究では、まず、職業経験を認知機能の観点から評価する従来の指標を批判的に検討した上で、第2章に示される研究1において職業経験における認知的活動を定量化する指標を作成するために、職業に基づく複雑性と個人が仕事を行う上で必要な技能の2側面を評価する指標の有効性について検討した。その結果、個人差をも含む評価法の有効性が示された。

研究2では、研究1の成果に基づいて新に作成された包括的な職業経験評価法を用いて、70歳の単一出生コホートの大規模サンプルによるデータを解析した結果、児童期の学業成績や教育歴などの関連要因を統制しても、複雑な職業経験をした高齢者は認知機能が高いことが示された。すなわち、青年期までの教育経験のみならず、成人期の職業的経験の認知的複雑さが、高齢期の認知機能の基盤となっていることが推定された。

研究3では、心身の加齢の影響がより強いと考えられる80歳の単一出生コホートの大規模サンプルによるデータが、70歳群のデータと比較検討された。その結果、80歳群においても複雑な仕事を経験した高齢者は認知機能が高いことが示され、70歳群の結果が再現された。この結果から、生理的機能の低下が大きいと考えられる後期高齢者においても、成人期の職業経験がなお影響力を維持していることが示唆された。

第3章の総合論議では、本研究で新に開発された職業経験の認知的複雑さに関する評価法に関して、改めてその方法の特色や応用可能性が検討され、今後の研究課題や発展の可能性に関して、仮説とともに提起されている。

本研究は、従来、理論的枠組みが示されるのみで、実証研究の行われることの少なかった生涯発達心理学の領域で、70歳と80歳の2つの出生コホートの大規模サンプルによるデータを比較するという研究デザイン上の斬新なアイデアによって乗り越えようとした研究と評価することができ、その価値は極めて高いと思われる。以上より、本論文は博士（人間科学）の学位授与に値すると判定した。